

第47回高知女子大学看護学会 ワークショップ

ワークショップ1：

生きづらさを抱える人の農業作業を通じた社会参加～農福連携～

【コーディネーター】

野口 裕子(高知県中央西福祉保健所、51期生)
久保田 聡美(高知県立大学看護学部、32期生)

【企画の意図】

農福連携は、高齢化による労働力の不足が深刻化する農業現場を障害者の活躍の場につながると全国でスタートしたものの、まだ発展途上の段階である。その中で高知県安芸市の事例は、農福連携を超えた新たな可能性について多くの示唆が得られると考えた。

【話題提供者の紹介および話題提供の内容の概要】

公文一也氏

(高知県安芸福祉保健所、作業療法士)

県の精神保健福祉センター長から依頼された「自殺予防」からスタートした安芸モデルのシステムの全体像、そのシステムの中で、農福連携に参加した人たちが困り事を共有し、新たな提案を通して改善を重ね、地域でいきいきと働く姿を紹介いただいた。安芸モデルの特徴は、農福連携が精神障害という枠組みではなく、私たちも含めた生きづらさを抱える人たちを取り巻く地域全体の支援システムの中の一部であるということが語られた。

【ディスカッション内容】

障害者雇用のニーズが地域から生まれた背景から、具体的にどのような工夫があり、どのような地域連携が今の仕組みを支えているのか、就労が続かない人はいないのか等の質問を頂いた。それに対して農家に出向いて詳しく丁寧に障害特性を説明し、その人に合う仕事を探す仕組みの存在、中断者の具体的な数も把握した上で、長い目で見守りを継続している現状が語られた。このような丁寧な関わりが農家との強固な信頼関係に基づく雇用につながり、農福連携

が安芸市民の誇りとなって次の支援者へのバトンが渡される経緯が伝わってきた。

人を知る人、地域を知る人、仕事を知る人、システムを知る人が協働して、網の目のような社会全体のセーフティネットを目指し、次々と新しい事業やシステムを構築し、運営している。まさに、安芸モデルは農福連携を超えた地域創りを目指しているモデルといえる。

ワークショップ2：

地域包括ケアシステムにおける入退院支援事業

【コーディネーター】

加藤 昭尚(高知開成専門学校、修士15期生)
森下 安子(高知県立大学看護学部、26期生)

【企画の意図】

本事業は、「地域と病院が協働で取り組める入退院支援システムを！」という卒業生の提案で始まった。ワークショップでは、具体的な取り組みを紹介し、高知県ならではの入退院支援システムについて参加者とともに考えた。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

竹松 節子氏(高知県立幡多けんみん病院)

竹松氏からは、「入退院支援の推進に向けた当院の取り組み報告」と題して幡多地域の現状と課題やこれまでの入退院支援事業の取り組みについて紹介があった。具体的には、窓口役割についての明確化や退院プロセスシート・スクリーニングシートなどのツールの活用に取り組んだことや事例の紹介があった。また、事業を通して看護師の受け持ち意識が高くなったことや地域との連携が増えたことなどの変化についても述べられていた。

【ディスカッション内容】

参加者からは、入退院支援の現状や悩みなどについて発言があった。入退院支援に関する悩みでは、本人の意思決定支援をするための工夫や情報共有するための時間の確保、入退院支援に関する研修の実施状況と方法、新たな取り組

みをするときの工夫などについて質問があった。新たな取り組みをする上での工夫については、業務を増やさないように既存の委員会などの仕組みを利用していくことや、取り組みやすい事例から取り組み、成功体験を積み重ねることが大切、といった経験をふまえた意見交換がされた。また、研修については、事例の振り返りについて意見交換がされた。事例の振り返りでは、丁寧に振り返ること、できなかったことだけでなくできたことも振り返ること、入退院支援を評価してフィードバックすることが大切という点が共有された。

ワークショップ3：

乳幼児期からの発達障害児等への早期療育支援

【コーディネーター】

松村 晶子（高知大学教育学部附属小学校、50期生）

高谷 恭子（高知県立大学看護学部、45期生）

【企画の意図】

子どもの発達に不安を抱える家族と多職種がチームを形成して、早期から療育支援を行うことは、子どもの育ちを促すとともに、子どもと家族の地域生活における力を高めることが期待できる。この企画を通して福祉と医療連携における看護の役割を考えた。

【話題提供者の紹介および話題提供者の内容の概要】

岩崎史明氏

（特定非営利活動法人土佐の風 児童発達支援事業所とさっちくらぶ）

乳幼児期の子どもたちが自発的に自分の身体と脳と環境に働きかけながら、“ない動作”から楽しみを見出し“次の動作”へと動きのパターンを身に付けていくことを、研究論文やご自身の子育て記録を踏まえてわかりやすくお話しいただいた。このような子どもの発達のエネルギーを活かして、発達の緩やかな子どもたちや運動が苦手な子どもたちの療育支援を親や大人たちの“気づき”の段階から「一人一人に合わせたプラン」を専門的に提供する『とさっちくらぶ』

の活動の実際についても話題提供いただいた。

【ディスカッション内容】

助産師、看護師、養護教諭、親の立場から乳幼児期の子どもの気になることを中心にディスカッションを行った。例えば、腹ばいなどの子どもが初めてできる移動経験には、体幹の土台となる力や左右の協調性が身に付くことに加え、子どもが自分の身体に合う動きを発見する場であること、他者とのやり取りがなされることから言語・社会性の発達も促す機会になるという理解を深めることができた。このように、理学療法士としての専門性を活かし、かつ、保育士などの多職種と協働することで、子どもの発達を促す役割が補完され、さらに発達が促されることを再確認した。また、親子遊びを取り入れることで、子どもの反応をその場で親と振り返り、子どもの好みや価値観を共有しながら、親子の相互作用や言語の発達を促す効果的な支援のあり様についても深めることができた。

ワークショップ4：

卒業生のキャリアデザイン

【コーディネーター】

森本 紗磨美（高知県立大学看護学部、45期生）

神家 ひとみ（高知県立大学看護学部、54期生）

【企画の意図】

高知県内で活躍する保健師、助産師、看護師、養護教諭の卒業生に、専門職として大学生から社会人へと歩みを進める中での経験談や困難を乗り越えるための知恵と工夫、キャリアデザインについて語っていただき、参加者と共有した。

【話題提供者の紹介および話題提供者の内容の概要】

山下智里氏（高知赤十字病院、助産師3年目 65期生）

小松愛友氏（高知県幡多福祉保健所、保健師2年目 66期生）

岩本幸大氏（高知県立大学看護学研究科博士前期課程、看護師4年目 63期生）

田中あさぎ氏（高知県立宿毛高等学校、養護

教諭2年目（66期生）

卒後2～5年の4名はそれぞれ、助産師、保健師、養護教諭として実践を行い、1名は現在、大学院へ進学し学びを深めている。話題提供者から、それぞれの臨床経験、職場における取り組み、現在の職種や大学院を目指すきっかけ、今後の目標やキャリアについて順番に発表していただいた。

【ディスカッション内容】

各職種の専門性やキャリアデザインの多様性に関する内容を参加者の方々と共有した。勤務していく中でどのように自分たちの課題を乗り越えてきたか、卒業生同士のネットワークより

情報共有や相談できるシステムがあることで安心して働くことができていること、周囲からのサポートを得ながら自分たちのできることを実践していることなどが語られた。一方で、それぞれの職種に特化した知識や技術が求められるため、臨床現場と大学が連携し、卒業後も継続的に支援をしていくことの重要性について参加者同士が意見交換する機会となった。さらに、今後のキャリアについて、話題提供者だけでなく参加者の方々から、大学院で学ぶ楽しさやそれぞれの体験を語っていただき、大学院へ進学することが身近に感じられるように情報提供や意見交換を行うことができた。